

学芸員の仕事③梱包と開梱



(↑写真①作品開梱の様子)



(↑写真②開梱後の検査)



(↑写真③陰影により彫りが美しい
「雲に麒麟」)

同じ展示を何度も観に来る人は少ないものです。同じ展示をしつづけて展示替えをしないと見飽きられてしまうためか、来館者が少なくなります。来館者が恒常的に来るようにするためには、展示替えが不可欠です。

当館では、おもに収蔵品で構成する展示を企画展、他の機関から借用した資料や作品を中心に構成する展示を特別展とよんでいます。企画展で収蔵庫からの展示品の出し入れにも細心の注意を払いますが、特別展で他機関から展示品を借用することとなれば最高度の配慮が必要です。

借用品を安全に搬入搬出するためには、高度な梱包技術が必要です。かつて何かの会合で、ある博物館の学芸担当の方が、「梱包が出来ない学芸員のいる館には貸せない。梱包技術を見てこの人はダメだと思ったら、たとえ借用書類が整っていても、その時点でお帰りいただく」などと語っていました。学芸員はそれが常識で、当館でも同様の考えです。梱包が出来ないと作品や資料の移動が出来ず、展示替えが出来ません。したがって梱包は、展示替え、つまり恒常的な入館者の確保につながる重要な技術です。

(写真①)は厳重に梱包されて慎重に運ばれてきた作品の最も内側の梱包開梱される場面で、開梱後の検査で全く異常がないことが確認されました(写真②)。この作品は特別展「江戸の名人彫物師島村圓鉄1720」のときに、ある神社から借用させていただいた本殿臺股(ほんかえるまた)彫刻「雲に麒麟(きりん)」で、作者は島村俊濟(しゅんさい)。江戸時代中期の元禄から享保ごろの時期の名品で、所蔵する神社のある県の指定文化財になっています。(写真③)はこの作品のライティングを考えていたときのもので、300年ほどの時を経ても美しい彫りと彩色が残っています。この特別展で借用された作品は再び厳重に梱包されて運ばれ、すべて無事にお返ししました。